私のまわりの子どもたち

高橋　昭子

青山通りに面して児童館があり、私の保育園はそのうしろ側にあるが、ほとんど通りの騒音も気にならず都心にしてはまあまあ、庭の広さも子どもたちが遊ぶには充分だし、二十年経た杉、けやき、しい、桜、木蓮の木をはじめ周りも緑が多く、日当りは抜群で南側に面した乳児室は真冬でもポカポカと暖かく着替えの時など裸で過せる程である。

地域柄母親の職業はすぐ近くの原宿を中心とするファッション関係者が多く、女性の活躍は目ざましく母親のイメージより働く婦人の姿そのものである。

子どもの為に出来た保育園が年々歳々こうした母親たちの為の、働く婦人たちの為の便利な所として利用されているような気がしてならない。

母親の仕事が朝ゆっくりならばその子どもは毎日でも遅刻してくる。母親の仕事が忙しく夜までやらなければならない時には子どもはそばで深夜までテレビを見ているのである。

何故早寝しなければならないか、何故早起きがよいのかをいくら園側で云っても馬の耳に念仏である。また子どもの具合が悪くてもたまたま母親の仕事が忙しい時期ならば熱さましで熱を下げて連れてくる。口内炎で何も食べられなくても「意外と元気です」と連れてくる。

ある時青山通りに面して保育園の東側にビルが建つことになり数人の母親が奮起し華々しく建設反対運動を起こした。

子どもの今日の健康より将来の日本の子どもたちの為に「子どもから太陽を奪うな」という訳である。もし本当に子どもたちから太陽が奪われるようなことがあればこれは一大事であり、もっともっと社会全体が一緒に考えるべきであり、とりあえず社会の身近な一員である父親たちの参加ももっと必要であったろう。最近頓に子どもの送り迎え、食事の仕度等に父親の協力が目立つにもかかわらず、こんな時には母親まかせの家庭が多かったように思う。父親たちは一体どう考えていたのであろうか、仕事だけでも大変な上、朝早くからバリケードまた夜遅くまで話し合いの日々が何日も否何ヶ月も続いたのである。

発育の著しい乳幼児期に毎日毎日の睡眠・栄養は欠くべからざるものであり、自分でどうすることも出来ない乳幼児に代って母親がやらなければならない、やるべき筈のそして今やらなければならないことばかりなのであるにもかかわらず、連日の外食及び保育園での長時間保育の後引きつづき親たちが話し合っている間、再び大勢の子どもと一緒におかれるのである。子どもたちはこの間神経の休まる時はなかったのではないか。風邪ひきが例年に比べ著しく多発し治りきらないうちに出てくるためか二次的病気にまでなる子どもが多くいた。目に異常の出た子ども、突発性難聴等である。また交通事故も大事にいたらなかったものの保育園以外で三～四件あった。注意力が散漫になっていたのであろう。睡眠不足ではなかったか、つかれていたのであろう……といろいろ考えさせられることがあった。

保育園側においても何とかこうしたことに対処することが出来なかったかと、今さらながら反省している次第である。

子どもが健康で順調に成長発育する権利を願って止まない。

（港区・青山保育園）